

説教余滴 2019年10月31日『モンテ・クリスト伯』  
と大デュマ

1844年から46年、フランスのパリで新聞小説として連載された「モンテ・クリスト伯」は空前の人気を博します。単行本としても出版され、推定部数は当時としては驚異的な4万、人々の心をとらえました。人気の最大の秘密はその構成力。読者に新聞を購読させるために、毎回小さな山場を持ってきて、さらに次回に続く謎を残し各回が終わるという手法。これは、今日まで踏襲されています。日本語訳は文庫本で7巻からなる長編です。

壮大な復讐劇ですが、偉大な人間再生劇との評価もあります。

「モンテ・クリスト伯」の作者アレクサンドル・デュマは、革命の申し子でした。父はフランス貴族と黒人女性との間に生まれたいわゆる「私生児」で元奴隷。将軍に大出世するが、ナポレオンと仲違いし不遇の内に亡くなります。デュマの多くの作品は憧れの父の姿を主人公に投影したものともいわれます。またデュマ自身の生涯も波瀾万丈で、自らの生活が多くの作品で引用されています。『モンテ・クリスト伯』でダンテスがカスピ海から生きたままチョウザメを運びふるまう豪勢な宴会シーンは、モンテ・クリスト城と名付けた自宅での暮らしそのもの。古い因習にとらわれることなく革命後のフランスを自由に生きた近代人デュマの生き方そのものです。

最後に「モンテ・クリスト伯」の著者、デュマについて書かれたものをご紹介します。佐藤賢一氏の『褐色の文豪』をお勧めします。フランス革命後の混乱の時代の波をうまく捕らえ、自由奔放に生きたデュマの生涯があますところなく描かれています。この本は三部作です。デュマの父、トマ将軍の伝記『黒い悪魔』、デュマの息子、デュマ・フィス（『椿姫』の著者）の伝記『象牙色の賢人』と続けてお読みになれば、革命時代のフランスが理解でき、夫々の小説を一層面白く楽しめるでしょう。